

「平成 28 年度国際漁業資源の現況」PDF 版 正誤表

作成日：2017 年 4 月 4 日

更新日：2017 年 6 月 30 日

2017 年 3 月 31 日に掲載した PDF 版に、以下のとおり表記に誤りがありました。ご迷惑をおかけしましたことを訂正してお詫び申し上げます。

なお、以下の PDF は最新版に更新しましたので、改めて落手くださいますようお願い申し上げます。

「国際漁業資源の現況（総括表） -1-」（2017 年 6 月 30 日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
左	クロマグロ 管理目標	WCPFC においては、親魚資源量を 2015 年からの 10 年間で歴史的中間値（約 4.1 万トン）まで回復させることを当面の目標とする	親魚資源量を 2024 年までに、少なくとも 60% の確率で歴史的中間値（約 4.1 万トン）まで回復させることを暫定回復目標とする
右	ビンナガ 北太平洋 管理措置	・漁業がないと仮定して推定した現在の資源量の 20% を下回らないよう漁業を管理（WCPFC、2014 年）	・漁業がないと仮定して推定した現在の資源量の 20% を下回らないよう漁業を管理（WCPFC、2014 年） ・漁獲努力量を現行水準未満に抑制（IATTC、2005 年）
右	ビンナガ 北大西洋 管理措置	TAC：2.8 万トン	（削除）
右	キハダ 中西部太平洋 資源の状態	SB ₂₀₀₈₋₂₀₁₁ /SB _{MSY} =1.37 C ₂₀₁₂ /MSY=1.02	SB ₂₀₀₈₋₂₀₁₁ /SB _{MSY} =1.37 F ₂₀₀₈₋₂₀₁₁ /F _{MSY} =0.72 C ₂₀₁₂ /MSY=1.02

「国際漁業資源の現況（総括表） -2-」（2017 年 6 月 30 日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
右	ミナミマグロ 管理措置	TAC の設定：2015～2017 年漁期の TAC は毎年 14,647 トン（日本 4,737 トン）	TAC の設定：2017 年漁期の TAC は 14,647 トン（日本 4,737 トン）、2018～2020 年漁期の TAC は毎年 17,647 トン（日本 6,165 トン）

「国際漁業資源の現況（総括表） -3-」（2017年6月30日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
左	ヨシキリザメ 北大西洋 最近5年間の漁獲量・捕獲量	日本：1,227～3,369 トン	日本：1,227～4,076 トン
左	アオザメ 北太平洋 管理機関・関係機関	IATTC, WCPFC	IATTC, WCPFC, ISC

「国際漁業資源の現況（総括表） -4-」（2017年6月30日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
左	ニシネズミザメ 南大西洋 最近5年間の漁獲量・捕獲量	日本：7～26 トン	日本：4～25 トン
左	ニシネズミザメ その他南半球 最近5年間の漁獲量・捕獲量	日本：16～55 トン	日本：12～42 トン
右	ニシネズミザメ その他南半球 次回の資源評価年	2019年	2017年
左	クロトガリザメ	日本：1～4 トン	日本：1～12 トン

	最近5年間の漁獲量・捕獲量		
左	ツチクジラ 最近5年間の漁獲量・捕獲量	日本：61～71頭	日本：57～71頭

「国際漁業資源の現況（総括表） -5-」（2017年6月30日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
左	クサカリツボダイ管理目標	産卵親魚確保による加入の促進と漁獲の安定	加入強度に応じた漁獲上限調節（順応的管理）による産卵親魚の確保と漁獲の安定

「国際漁業資源の現況（生物学的特性） -1-」（2017年6月30日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
左	大西洋クロマグロ 東大西洋繁殖期・繁殖場	地中海、ビスケー湾等、北緯35度以北の大西洋	6～8月 マジョルカ島からシチリア島にかけての地中海
右	大西洋クロマグロ 東大西洋索餌場・索餌期	北緯35度以北の北大西洋	北緯35度以北の大西洋
左	大西洋クロマグロ 西大西洋繁殖期・繁殖場	北緯35度以北の大西洋	5～6月 メキシコ湾
右	大西洋クロマグロ 西大西洋索餌場・索餌期	北緯35度以北の北大西洋	北緯35度以北の大西洋

左	ピンナガ 南太平洋 繁殖期・繁殖場	南緯 30 ~45 度	10~2 月（南半球の春・夏季） 中・西部熱帯～亜熱帯海域
右	ピンナガ 南太平洋 索餌場・索餌期	南緯 25~45 度	南緯 30 ~45 度
右	ジンベエザメ 捕食者	調査中	シャチ、ニシマカジキ

「国際漁業資源の現況（生物学的特性） -2-」（2017 年 6 月 30 日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
左	ツチクジラ 繁殖期・繁殖場	調査中 交尾期：10~11 月、出産期：3~4 月	交尾期：10~11 月、出産期：3~4 月 繁殖場：調査中

「国際漁業管理機関・資源評価機関の概要 -1-」（2017 年 6 月 30 日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
左	ICCAT 設立	1966 年	1969 年
左	NAFO 水域	北緯 35 度以西の北西大西洋	概ね北緯 35 度以北、西経 42 度以西の北西大西洋

「国際漁業管理機関・資源評価機関の概要 -2-」（2017 年 4 月 4 日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
左	NPAFC 水域	各国の領海の基線から 200 海里の外側の北緯 33 度以北の北太平洋及び接続水域	北太平洋とその付属海のうち、北緯 33 度より北で、各沿岸国の 200 海里以遠の海域
左	SEAFO 魚種	条約適用水域における全ての漁業資源（ただし、カツオ、マグロ等の	条約適用水域におけるすべての漁業資源（ただし、かつお、まぐろ等の

「04 クロマグロ 太平洋（要約）」（2017年4月4日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
04S-2	左下図	太平洋クロマグロの親魚資源量（1952～2012年）（上図）と加入量（1952～2012年）（下図）のトレンド 赤色の実線が最尤法による点推定値、マーク付の実線、上下の点線がパラメトリックブートストラップ法により計算した結果の中央値と90%信頼区間の端点。2012年（資源評価の最近年）の加入量の推定値は、推定精度が低いため、資源評価では使用されていない。（ISCでの2014年の資源評価の出力を編集した）	太平洋クロマグロの親魚資源量（1952～2014年）（上図）と加入量（1952～2014年）（下図）のトレンド 赤色の実線は最尤法による点推定値、上下の点線はパラメトリックブートストラップ法により計算した90%信頼区間の端点。2014年（資源評価の最近年）の加入量の推定値は推定精度が低いため、資源評価では使用されていない。（ISCによる公表値に基づく）
04S-2	右下図	太平洋クロマグロの親魚資源量（1952～2014年）（上図）と加入量（1952～2014年）（下図）のトレンド 赤色の実線は最尤法による点推定値、上下の点線はパラメトリックブートストラップ法により計算した90%信頼区間の端点。2014年（資源評価の最近年）の加入量の推定値は推定精度が低いため、資源評価では使用されていない。（ISCによる公表値に基づく）	加入水準の仮定（上図）及び漁獲管理措置（下図）の違いによる親魚資源量の将来予測結果の比較 グラフはシナリオごとの6千回のシミュレーション結果の中央値であり、計算結果の半数はこれよりも低い。両図中の破線は、資源評価期間（1952～2014年）における歴史的中間値（約4.1万トン）。下図における加入水準は、80年代の低レベルを仮定。（図はISC評価結果に基づき水産庁監修の下編集）

「08 ビンナガ 南太平洋（要約）」（2017年4月4日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
08S-2	要約表 世界の漁獲量	平均：8.2万トン（2010～2014年）	平均：7.0万トン（2011～2015年）

「09 ビンナガ インド洋（要約）」（2017年4月4日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
09S-2	左上図	インド洋ビンナガの国別漁獲量（1950～2014年） （IOTC データベース：2015年9月）	インド洋ビンナガの国別漁獲量（1950～ 2015 年） （IOTC データベース： 2016 年9月）
09S-2	左中図	インド洋ビンナガの漁法別漁獲量（1950～2014年）（IOTC データベース：2015年9月）	インド洋ビンナガの漁法別漁獲量（1950～ 2015 年）（IOTC データベース： 2016 年9月）

「11 ビンナガ 南大西洋（要約）」（2017年4月4日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
11S-2	要約表 我が国の漁獲量	1,129～2,019 トン 最近（2015）年：1,761 トン 平均：1,862 トン（2011～2015年）	1,129～ 3,106 トン 最近（2015）年：1,761 トン 平均： 2,019 トン（2011～2015年）

「14 キハダ インド洋（要約）」（2017年4月5日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
14S-2	左下図	SS3 による資源評価結果（神戸プロット）（IOTC 2015）	SS3 による資源評価結果（神戸プロット）（IOTC 2016 ）

「16 メバチ 東部太平洋（要約）」（2017年4月5日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
16S-2	管理方策のまとめ	まき網漁業：62日間の全面禁漁。沖合特定区での1か月間禁漁。	まき網漁業：62日間の全面禁漁。沖合特定区での1か月間禁漁。 漁獲上限導入（FAD 操業、イルカ巻き操業）。

「17 メバチ 中西部太平洋（要約）」（2017年4月5日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
17S-2	要約表 世界の漁獲量	3.4万～16.3万トン	13.4 万～16.3万トン

「18 メバチ インド洋（要約）」（2017年4月5日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
18S-2	管理方策のまとめ	FADs 数を 1 隻 550 基までに制限。	支援船の数はまき網船の半数を超えず、FAD 数は同時に稼働する数が 425 基、年間の取得数が 850 基までに制限。

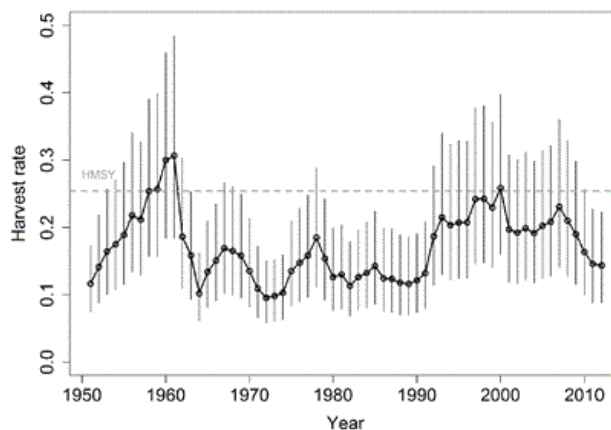
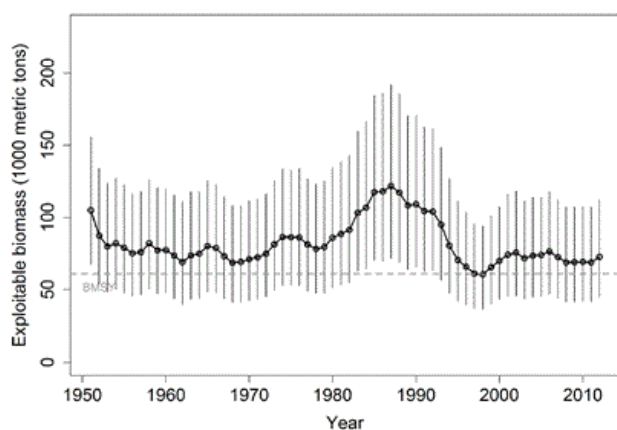
「20 ミナミマグロ（要約）」（2017年4月6日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
20S-2	管理方策 2 行目	管理方式事前に定められた方式	管理方式（事前に定められた方式

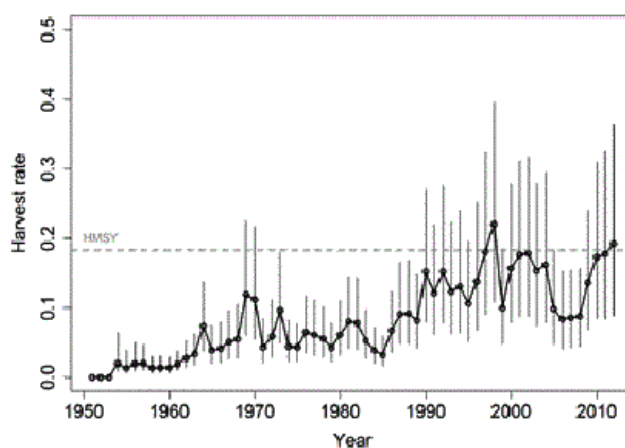
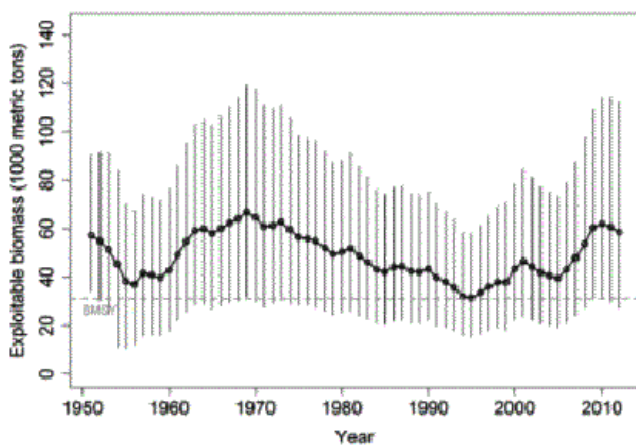
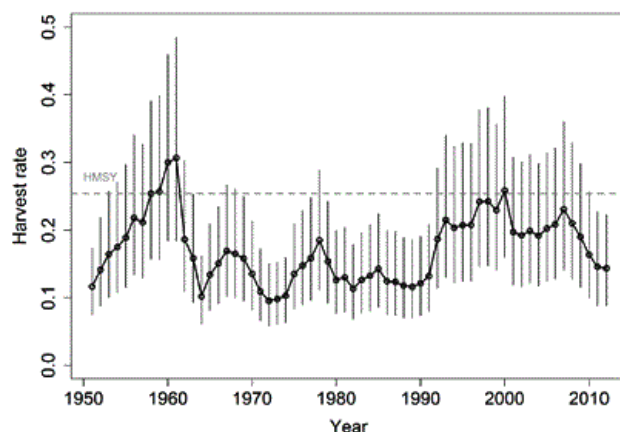
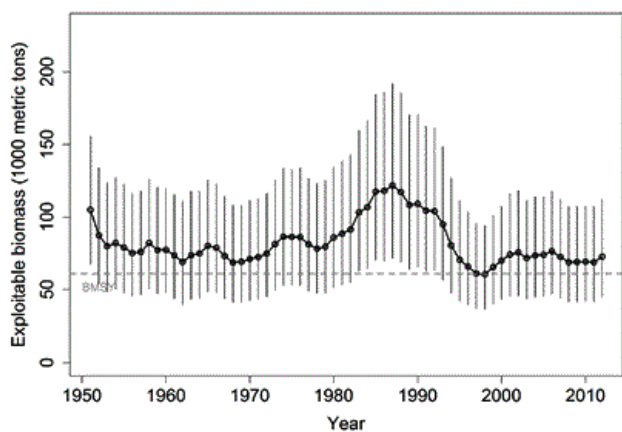
「21 メカジキ 北太平洋（要約）」（2017年4月6日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
21S-2	下図	プロダクションモデル解析の結果 (図：欄外 上)	中西部太平洋系群（上図）と東部太平洋系群（下図）のプロダクションモデル解析の結果 (図：欄外 下)

(誤)



(正)



「31 カツオ インド洋 (要約)」(2017年4月6日更新)

該当ページ	該当箇所	誤	正
31S-2	要約表 我が国の漁獲量	500~2,200 トン	522~2,153 トン

「32 カツオ 大西洋 (要約)」(2017年4月6日更新)

該当ページ	該当箇所	誤	正
32S-1	漁獲の動向 6行目	2012年は26.2万トンと歴史的に最も多い漁獲量を記録し、	2013年は25.5万トンと歴史的に最も多い漁獲量を記録し、

「37 ヨシキリザメ 全水域（要約）」（2017年4月6日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
37S-2	要約表 我が国の漁獲量	北大西洋（赤道以北） 11,227～4,076 トン	北大西洋（赤道以北） 1,227～4,076 トン

「39 アブラツノザメ 日本周辺（要約）」（2017年4月6日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
39S-1	漁業の特徴 15 行目	このように、1950 年代まではビタミン A の原材料として肝油を得るためにかなり積極的に本種が漁獲されてきたが、その後、合成ビタミン A の普及、価格低下などにより需要は大きく減少したと考えられ、アブラツノザメ漁獲量の増減は努力量の質的变化や操業パターンの変化によるものと思われる。近年の本種の漁獲は、アブラツノザメを漁獲対象として一部地域で行われている小規模漁業によるところが大きい。	(削除)
39S-2	管理方策の まとめ	■管理目標及び管理措置は検討中である。 ■漁業者による自主的な取り組みが行われている。	■ なし（漁業者による自主的な取組は実施中）
39S-2	要約表 （欄外補足）	※漁獲量は全国のさめ類漁獲量と過去のさめ類に占めるアブラツノザメの平均的な割合から推定した値（2014 年は暫定値）	※漁獲量は全国のさめ類漁獲量と過去のさめ類に占めるアブラツノザメの平均的な割合から推定した値(2015 年は暫定値)

「42 オナガザメ類 全水域（詳細）」（2017年4月6日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
42-6	要約表 世界の漁獲量	平均：15,271 トン	平均：15,906 トン

「45 海鳥類の偶発的捕獲とその管理（総説）」（2017年4月6日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
45-4	図 2	南大洋で使用されているトリライン	トリライン

「46 大型鯨類（総説）」（2017年4月10日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
46-1	背景	現在、ノルウェー及びアイスランドを除く IWC 加盟国が行うことができる鯨類の捕獲活動は、アラスカ・イヌイト他に許された先住民生存捕鯨、IWC 管轄外の種を利用する小型捕鯨及びイルカ漁業、そして国際捕鯨取締条約第 8 条に基づく特別許可の下での捕鯨調査（捕獲調査）のみである。	(削除)

「47 小型鯨類の漁業と資源調査（総説）」（2017年5月9日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
47-1	表 1	(欄外 上)	(欄外 下)
47-3	表 2	漁業対象資源の資源量推定値	主な小型鯨類の資源量推定値

(誤)

漁法	根拠地	鯨種	捕獲枠	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	
小型捕鯨	北海道	ツチクジラ		14	12	14	13	14	14	30	14	14	14	12	
		ツチクジラ		26	25	27	25	27	26	5	31	26	26	21	
	宮城県	タツバナガ	小型捕鯨業	22	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		ツチクジラ	の捕獲枠は	26	26	26	26	26	26	26	26	22	30	24	
	千葉県	マゴンドウ	本文参照	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	5
		オキゴンドウ		-	-	-	-	-	-	-	-	1	3	-	
	和歌山県	マゴンドウ		24	10	16	20	22	10	-	15	10	2	15	
		ハナゴンドウ		8	7	20	-	-	-	-	-	-	-	-	
	追込	静岡県	スジイルカ	7/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			ハンドウイルカ	39/34	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マダライルカ			45/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
オキゴンドウ			10/10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カマイルカ			36/36	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
和歌山県		マゴンドウ	117/132	40(2)	198(8)	243(5)	99(1)	219(1)	-	74(6)	172(7)	88(1)	41(2)	80(1)	
		スジイルカ	450/450	397(2)	479	384	535(5)	321	458(2)	406(8)	508(2)	498(1)	367	353	
		ハンドウイルカ	462/414	285(36)	285(80)	300(77)	297(57)	352(98)	395(168)	76(25)	186(131)	190(84)	172(78)	181(116)	
		ハナゴンドウ	256/251	340	232	312(8)	216(8)	336(8)	271(10)	273(17)	188(24)	298(12)	260(7)	211(6)	
		マダライルカ	400/400	-	400(13)	-	329(6)	-	125(16)	106(2)	98	126(45)	145(35)	59(9)	
突棒	北海道	イシイルカ	1,037/985	1,240	719	841	467	308	116	-	-	-	-	-	
		リクゼンイルカ	74/71	51	44	44	66	-	2	-	-	-	-	-	
	青森県	イシイルカ	2/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
		イシイルカ	4,980/4,732	5,394	3,312	2,975	1,947	1,362	1,140	89	29	77	14	11	
	岩手県	リクゼンイルカ	5,866/5,617	7,733	7,758	7,243	4,566	7,767	3,532	1,855	376	1,198	1,588	1,549	
		カマイルカ	154/154	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	宮城県	イシイルカ	193/183	246	181	254	180	103	-	-	-	18	2	4	
		リクゼンイルカ	212/212	-	-	-	-	-	129	8	-	-	32	28	
	千葉県	スジイルカ	8/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
		ハナゴンドウ	213/209	46	105	185	122	94	126	104	52	38	103	13	
和歌山県	スジイルカ	100/100	60	36	86	65	98	100	96	94	67	63	22		
	ハンドウイルカ	52/47	66	75	97	93	77	38	40	73	68	35	43		
沖縄県	マダライルカ	70/70	13	5	16	-	3	7	2	12	4	18	-		
	カマイルカ	36/36	-	-	-	-	7	-	-	2	-	-	-		
和歌山県	マゴンドウ	34/34	90	56	79	62	54	34	46	25	47	18	9		
	ハンドウイルカ	5/5	10	12	4	1	4	1	3	3	3	-	-		
和歌山県	オキゴンドウ	20/20	1	5	4	5	1	-	3	-	-	-	1		

(正)

漁法	根拠地	鯨種	捕獲枠	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	
小型捕鯨	北海道	ツチクジラ		14	12	14	13	14	14	30	14	14	14	12	
		ツチクジラ		26	25	27	25	27	26	5	31	26	26	21	
	宮城県	タツバナガ	小型捕鯨業	22	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		ツチクジラ	の捕獲枠は	26	26	26	26	26	26	26	26	22	30	24	
	千葉県	マゴンドウ	本文参照	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	5
		オキゴンドウ		-	-	-	-	-	-	-	-	1	3	-	
	和歌山県	マゴンドウ		24	10	16	20	22	10	-	15	10	2	15	
		ハナゴンドウ		8	7	20	-	-	-	-	-	-	-	-	
	追込	静岡県	スジイルカ	7/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			ハンドウイルカ	39/34	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マダライルカ			45/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
オキゴンドウ			10/10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カマイルカ			36/36	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
和歌山県		マゴンドウ	117/132	40	198	243	99	219	-	74	172	88	41	80	
		スジイルカ	450/450	397	479	384	535	321	458	406	508	498	367	353	
		ハンドウイルカ	462/414	285	285	300	297	352	395	76	186	190	172	181	
		ハナゴンドウ	256/251	340	232	312	216	336	271	273	188	298	260	211	
		マダライルカ	400/400	-	400	-	329	-	125	106	98	126	145	59	
突棒	北海道	イシイルカ	1,037/985	1,240	719	841	467	308	116	-	-	-	-	-	
		リクゼンイルカ	74/71	51	44	44	66	-	2	-	-	-	-	-	
	青森県	イシイルカ	2/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
		イシイルカ	4,980/4,732	5,394	3,312	2,975	1,947	1,362	1,140	89	29	77	14	11	
	岩手県	リクゼンイルカ	5,866/5,617	7,733	7,758	7,243	4,566	7,767	3,532	1,855	376	1,198	1,588	1,549	
		カマイルカ	154/154	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	宮城県	イシイルカ	193/183	246	181	254	180	103	-	-	-	18	2	4	
		リクゼンイルカ	212/212	-	-	-	-	-	129	8	-	-	32	28	
	千葉県	スジイルカ	8/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
		ハナゴンドウ	213/209	46	105	185	122	94	126	104	52	38	103	13	
和歌山県	スジイルカ	100/100	60	36	86	65	98	100	96	94	67	63	22		
	ハンドウイルカ	52/47	66	75	97	93	77	38	40	73	68	35	43		
沖縄県	マダライルカ	70/70	13	5	16	-	3	7	2	12	4	18	-		
	カマイルカ	36/36	-	-	-	-	7	-	-	2	-	-	-		
和歌山県	マゴンドウ	34/34	90	56	79	62	54	34	46	25	47	18	9		
	ハンドウイルカ	5/5	10	12	4	1	4	1	3	3	3	-	-		
和歌山県	オキゴンドウ	20/20	1	5	4	5	1	-	3	-	-	-	1		

「50 ミンククジラ オホーツク海・北西太平洋（要約）」（2017年4月10日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
50S-2	資源状態 5行目	高位にあると判断できる。近年のIWCによるRMP適用試験では、系群構造仮説や資源増加率の仮定などにより、資源状態に対する一致した結論は得られていない。	高位にあると判断された。一方、2013年に終了した第2回目のRMP適用試験の結果では、下記のように系群仮説の問題から一致した結論が得られなかったものの、基本的な6つのケースの平均で、我が国太平洋岸では年間17頭の捕獲枠が試算され、初期資源量に対する割合は、少なくともこれらのケースでは、RMPのもとで捕獲枠が算出される54%以上にあることが示された。

「52 ニタリクジラ 北西太平洋（要約）」（2017年4月10日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
52S-1	生物学的特性	■その他：近年、本種を	■その他：我が国周辺には太平洋沖合に分布する西部北太平洋系群と東シナ海～四国沿岸に分布し体サイズがやや小さい東シナ海系群が知られる。2003年以降、本種を

「53 シロナガスクジラ 南極海・南半球（要約）」（2017年4月10日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
53S-2	管理方策のまとめ	■生態的に競合する鯨種間の関係の解明がさらに必要。	■生態的に競合する鯨種間の関係の解明がさらに必要。 ■資源動向モニタリングの継続が必要。

「54 イワシクジラ 北西太平洋（要約）」（2017年4月10日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
54S-2	左図	(1910～2014年)	(1910～2015年)

「55 スナメリ 日本周辺（要約）」（2017年4月10日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
55S-2	管理方策のまとめ	■当面の目標は、現状の維持（仙台湾から房総半島東岸にかけての海域ではもとの水準への回復）。	■当面の目標は、現状の維持（仙台湾から房総半島東岸にかけての海域ではもとの水準への回復）。 ■目視調査で資源量と分布状況をモニタリング。

「57 トド 北太平洋沿岸・オホーツク海・ベーリング海（要約）」（2017年4月10日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
57S-2	資源状態 1行目	以西の西部系群のうち	アラスカのサックリング岬（西経144度）以東の東部系群は1970年代半ば以降年率約3%で増加傾向にある。同岬以西の西部系群のうち

「58 さけ・ます類の漁業と資源調査（総説）」（2017年4月10日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
58-3	右1行目	2015年漁期は約3.7万トン、2016年漁期は9月下旬で4.1万トンに達している。地域別に見ると、	2015年は約4.5万トンと2013年に次ぐ水準を記録したが、2016年漁期の9月下旬の集計値は約5.0万トンと既に2015年を上回っている。地域別に見ると、

「59 カラフトマス 日本系（要約）」（2017年4月10日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
59S-2	右上図	日本系カラフトマスの来遊漁獲数と2年前の9月の降水量の関係	日本系カラフトマスの資源増加率と卵仔魚期（1～2月）及び稚魚降下期（5月）の気温との関係

「60 サケ（シロザケ） 日本系（要約）」（2017年4月10日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
60S-1	漁獲の動向 4行目	（2011～2015年）の漁獲量は	最近5年間（2011～2015年）の漁獲量は

「61 スケトウダラ（総説）」（2017年4月11日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
61-1	右7行目	（水産庁・水産総合研究センター2016）。	（水産庁 水産研究・教育機構 2016）。
61-2	米国水域 10行目	2014年には132万トン	2015年には132万トン

「63 カラスガレイ オホーツク公海（要約）」（2017年4月11日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
63S-1	管理・関係 機関	水産庁・国立研究開発法人水産総合研究センター	水産庁 水産研究・教育機構

「65 東シナ海・黄海の漁業資源（総説）」（2017年4月11日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
65-5	資源状態 8行目	低い値が続いていたが、2014年は	低い値が続いていたが、2015年は
65-5	資源状態 14行目	（2010～2014年）の資源量の推移から	（2011～2015年）の資源量の推移から

「68 アルゼンチンマツイカ 南西大西洋（要約）」（2017年4月11日更新）

該当ページ	該当箇所	誤	正
68S-1	最近の動き 2行目	2016年漁期もなかった。	2016年漁期もなかった。
68S-2	資源状態	本資源の大部分はアルゼンチン EEZ 及び英国領フォークランド FICZ 海域内に分布し、管理上は便宜的に南緯 44 度線で区切って、南方資源と北方資源に分けて異なる管理方策をとっている。北方資源は、実質アルゼンチンのみが管理し、前年の漁獲実績による入漁隻数制限と漁期制限（5月1日～8月31日まで）による努力量管理方策を実施している。一方、南方資源は、SAFC に基づき英ア二国が共同で、前年の漁	アルゼンチン政府が公表しているアルゼンチン EEZ 内の月別の漁獲量の変遷をみると、2009～2012 年にかけての低い水準から、2013 年以降にかけて増加傾向が示され、2014 年、2015 年に豊漁となった。しかし、2016 年には来遊資源が減少し、アルゼンチン EEZ 内の漁獲量は集計が終わっている 8 月までの月別漁獲量は低く推移している。操業データに基づく CPUE など近年の資源水準を示すデータは公表されていない。しかし総

		<p>獲実績による入漁隻数制限と解禁日(2月1日)制限による努力量管理のほかに、再生産管理を実施している。再生産管理とは、本種が単年性(年魚)であり、世代が重複することがないことから、ある年の資源はすべて前年の産卵親イカから生まれてくる再生産関係がある程度成立すると仮定し、来漁期の資源に回す親を一定量確保する施策である。相対逃避率(目標値40%)に加え、絶対逃避量(4万トン)を設定し、漁獲量を管理している。</p>	<p>漁獲量がおよその資源水準を表すと考えると、2000年以降、わずかに数年間で年間漁獲量が20万トンから100万トンまで変化し、近年の資源変動が極めて激しく不安定になっていることを示し、推測される2016年の総漁獲量の激減から、現在の資源状態は低位と判断される。</p>
--	--	---	--

「71 ナンキョクオキアミ 南極海(要約)」(2017年4月11日更新)

該当ページ	該当箇所	誤	正
71S-2	要約表 我が国の漁獲量	平均:0.3万トン(2011~2015年)	平均:0.3万トン(2011~2015年) (ただし、2012年(2012/13漁期)より操業なし)